仁尾浦騒動

香川景全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仁尾浦騒動

【Ｎコード】
Ｎ２１６６Ｃ

【作者名】
香川景全

【あらすじ】
讃岐国仁尾浦は延文三年（１３５６）詫間氏の寄進により、京の賀茂社領として人々は平穏な日々を過ごして来たが、嘉吉の乱の当時、守護代と代官の間で二重差配を受ける。その間のエピソードを物語風に書き下ろして参ります。お楽しみに。実は２００７年９月１０日に「脳血栓」を患いまして左手が思うように働きません。リハビリでかなり復活は致しておりますが投稿速度が遅くなるのは否めません。御迷惑をお掛けいたしますがご理解の程をお願い申し上げます。

第1章　仁尾浦

第一章　仁尾浦

大小二つの蔦島が、わずか半里先に自然の防波堤として横たわった仁尾浦は、その日も鏡面の様な水面（みなも）を見せ、数曹の漁舟が艫われ、朝日の中に浮かびあがった。

「何、弥五郎が守護代の為をして兵船を仕立てたと申すか。」
浦代官香西五郎左衛門は代官補船越輿三郎の言葉に白い京面顔を赤らめ怒鳴った。
「お主は何をしておるのじゃ。この仁尾浦での兵船徴発は京におわす細川様家中香西豊前守様よりの命で、我が一手のものでは無いか。これは癖事である。今すぐその弥五郎とその一味を拘引せよ。」
「さらば船はいかが致しましょうぞ。」
「何を申しておる、船も押さえよ。」

仁尾浦は延文三年（１３５６）詫間氏の寄進により、京の賀茂社領として人々は平穏な日々を過ごして来た。
住民は神人又は供祭人と呼ばれ、惣衆と言われる組織を作り、その結合は強固なものであった。
家数も5、６００戸を数え、この時代では大きな港町を形成していた。

応永２２年（１４１５）１０月２２日、讃岐守護細川満元より、以後社家の課役は停止。海上諸役のみを行う事を命じられた。

これは、京都の鴨御祖社領であったことが否定され、公領に転じその公領の知行者に海上諸役を果たすことが命じられたものである。
更に２７年１０月１７日の文書では兵船負担の忠節を礼し、当浦の神人に対する狼藉をなす者には罪科に処す旨が述べられ、細川氏は自ら所領経営を行うことはなく、代官を派遣する。
香西豊前守は一族の香西五郎左衛門を浦代官として任じた。
賀茂神社文書に依ると浦代官は少なくとも、永享１０年（１４３８）１月から嘉吉２年（１４４２）１０月までの間は香西氏がつとめていたとある。
この段階で、仁尾浦は細川氏の直轄領としての位置付けが出来上がった様である。

第２話からは本格的なストーリーへと入ります。お楽しみに。

第2章　浦代官

第2章　浦代官

神人達の寄進で新造なった代官屋敷に入った香西五郎左衛門は、頬骨が張った色白の顔の一線を引いた様な細い目を更に細くして、浦代官補としての船越与三郎に言った。

「ここの神人達は裕福じゃのう。」

「さようでございますな。これだけの普請をポンと寄進出来るのですから、かなりの貯えを持しておるはずでしょう。」

代官と違って色の浅黒い大男の代官補は肯き答えた。

「これからは、神人達は生かすな、殺すな。取れるだけの物はすべて取ってしまえ。」

仁尾浦代官に就任した香西五郎左衛門は「役徳」又は「徳役」と称される兵粮銭催促、一国平均役催促の賦課を行った。

「新兵衛尉、惣官としてのお主に申し渡す。御用である。こたびの和州御陣に際しての兵粮銭３０貫文を早急に納めよ。兵船は４艘じゃ。」

「ははー、あい勤めさせていただきまする。」

惣官の原新兵衛尉は白砂に頭をすりつけ代官の命を受けた。

「よしよし、後は与三郎に聞け。」

永享１１年春。惣官の原新兵衛尉は再度代官に呼ばれた。

「新兵衛尉。先の御用は大儀であった。戦が長引いてな、次の御用は５０貫文じゃ。」

庭に正座させられたうえ小半刻も待たせられ、やっと代官香西五

郎左衛門がきざはしまで出て来たと同時に能面のように白い顔を見せ言った。
「へへー、されど、先に３０貫文を収めさせていただいたばかりに、５０貫文とは無茶でございます。」
原新兵衛尉は白砂の上で痛い足をかばいながら頭を上げて代官に言った。
「何を申しておる。これは細川様よりのきついお達しである。ならば使者雑用以下として１０貫文計６０貫文を納めよ。」
「そ、そんな無体な。」
「こりゃ、無体も何もあるものか。御用じゃ。すぐにでも帰って集めるのじゃ。」
横から代官補の船越与三郎が言った。
「そ、それにしても６０貫文は過ぎまする。」
「よしよし、原新兵衛尉。さすればこうしよう。この御用を厳密に納めたならば以前の徳役の事は返し下さるものとしよう。どうじゃ。」
代官の五郎左衛門が腰を落として新兵衛尉を諭すように言った。
「はっさようで。ならば村へ帰り御用を勤めさせていただきます。」
原新兵衛尉はこれ以上言っても仕方が無いと諦め代官屋敷をあとにした。

「どうじゃ、与三郎。あやつらは持っておるは。何としても吸い上げるのじゃ。」
原新兵衛尉が帰って代官香西五郎左衛門は座敷に座り、船越与三郎を前にして言った。
「それにしても代官様。先の徳役を返してやるとはいかがなものでしょうか。」
「ははは、お主も馬鹿じゃのう。誰が返すものか。」
「さらばうそでござるか。」
「うそも方便じゃ。返してくれと言って来た時には新たな徳役を作

ればいいではないか。」
代官は片手に持った扇子で自分の頭を叩きながら
「どうじゃ、ここの使いようじゃて。」
と言った。
「はっ、なるほど。左様でございまするなぁ。代官にはかないませぬ。」

兵船徴発は細川氏所領として義務づけられている「海上の諸役」の具体的形態である。
本来兵船徴発は守護代が課すものであるが仁尾浦では代官香西五郎左衛門が賦課している。浦人は精一杯「御用」をつとめていると述べている。
代官の親父逝去に伴う徳役はまさに香西氏の恣意によって課された「徳役」であり、仁尾浦神人は２０余貫文を納めさせられている。
兵船徴発は守護代側の軍勢催促の権限と衝突をひき起こした。

仁尾浦は「今度の御大儀」すなわち嘉吉の乱勃発に伴い讃岐国「西方御勢上洛」の為ということで、西方守護代香川修理亮景光から「出船」の催促を受け、船二艘を仕立てたところ、代官香西五郎左衛門からそれは「僻事」、すなわち取り違いであるということを申し懸けられ、香西氏はその対応処置としてであろうか船頭を召し取り、船を止め置いた。
そして、香西方への船のことは「御用」に従ってまた命令を行うからまずは待て、と香西五郎左衛門から文書で通知を受けたので、船の準備はやめて指示を待っていた。

第3章　くじ引き将軍（前書き）

嘉吉の乱へと進むバックグラウンドを今回は書いてみました。

第3章　くじ引き将軍

第3章　くじ引き将軍

足利幕府は、三代義満に至って南北朝を合体させ、ようやく全国の統一、幕政の確立をなしとげたかに見えた。義満は、社寺の勢力や地方豪族の制圧に成功したばかりでなく、朝廷や公卿ともむすんで、内大臣、左大臣まで歴任し、明国との交易もおこない、壮大華麗な示威と政治力とを見せた。

義満の死後、長子の義持が4代目将軍となった。

その頃から、幕府のもう一つの柱である関東政治を総括していた関東管領が不穏な動きをはじめ、さらに地方豪族たちも、政権をねらって微妙なうごきを示しだしたのである。

父3代目将軍と違い、足利義持には妻妾が少なく子も少なかった。

１９２３年に、ただ一人の男児義量（よしかず）を5代目将軍の座に座らせ自分は引退して出家した。そんな中、就任後2年で義持が若死にしたので、出家していた義持だったが再度将軍に返り咲いた。

それから3年を経た応永３５年（１４２８）1月、足利義持は足に出来た痒の為に危篤状態になった。衰退する身体を心配して、近侍した畠山満家、細川持元、斯波義淳、山名時熙達要職に在った者が後継者の評議をした。醍醐寺の三宝院満済に義持の意向を確認させた。

義持は力無く嘆いた。

「わが指名した将軍に、皆がそれに従うものでなければ意味が無い。お前たちがこれという人物を選ぶがよい。」

このため、満済らは相談の上、義持の弟で何れも僧籍に入ってい

た青蓮院義円、大覚寺義昭、相国寺永隆、梶井義承の四人を遡上にあげた。しかしいくら相談しても堂々巡りで結論にならない。そこで籤引によって次の将軍を決めることになった。

籤は満済が作り、山名時熙が封をした。

義持は正長元年正月１８日に亡くなった。

用意されていたくじを管領畠山満家が源氏の氏神である石清水八幡宮の社前で引いた。

６代目将軍にくじで当たったのは現青蓮院門跡義円で３５歳になる。

義円は３代目将軍義満の四男で、応永１０年、１０歳でに青蓮院へ僧として入れられ、大僧正に任じ、天台座主に補せられていた。いわば俗世とは無縁の人物であった。

いきさつはどうであれ、くじ引きで決まった将軍というのは後にも先にも初めてのことであり事実である。

それにより義円は還俗し、正長元年３月１２日義宣（よしのぶ）と名を改め、義持の喪明けを待ち、翌正長２年（１４２９）３月１５日に名を義教（よしのり）と再度改め、正式に第六代将軍の座に就いた。

六代将軍となった足利義教は籤引き将軍として不安定な政治の場に立たされた事から専制将軍を志向した。有力守護大名を力づくで抑えこむ方針をとった。

１４４０年５月には一色義貫（よしつら）・土岐持頼（ときもちより）を殺し、嘉吉元年（１４４１）４月には後に結城合戦と呼ばれる、先に討たれた鎌倉公方足利持氏（うじもち）の遺児を擁して挙兵した結城氏朝（うじとも）をも滅ぼしていた。

豪族のみならず朝廷公卿に対しても極めて厳しく、特に朝廷の綱紀粛正に努めた。

例えば、朝廷内の風紀紊乱を防止するため男女別室の制をも設け、

場所柄もわきまえずに情事に耽る者への厳罰を定めた。
さっそくその槍玉にあげられた哀れな人物は楊梅少将兼重である。
愛人の『あちゃ』という女官が禁中で出産した為情事が露顕し、即座に『あちゃ』は追放、兼重は所領没収の上に遠流という重罪に処せられた。
さらに、公家の幕府参賀を年末・年始と節日だけに制限した。これは公家がその権勢におもねて幕府にばかり出入りするので、内裏が火の消えたように寂しい状況となっていたのを憂いて、内裏への出仕の規定を厳重にしたものである。
又、義教の直衣初めの儀が行われた永享2年（１４３０）１１月、東坊城益長はふっと笑い声を漏らした。義教は耳ざとくそれを聞き咎め、益長の弁明も聞かず、所領二箇所の没収と籠居を命じた。
義教によって所領没収、遠流、死罪に処せられた公家・神官・僧・女房などの総数は、永享６年（１４３４）６月公家中山定親の日記『薩戒記』に書かれているだけでも８０名にのぼった。
幕府主脳の畠山満家は、義教の豪毅な性格を利用して幕府支配を好まぬ豪族勢力を制圧しようとした。義教は満家の死後も、その子の持国を管領に任じて、豪族勢力の削減、南都北嶺の僧徒の暴動鎮圧などをやった。
更に、鎌倉に君臨して足利幕府に取って代わろうとする関東管領足利持氏をも、その内紛に乗じて攻め滅ぼした。

第3章　くじ引き将軍（後書き）

次回は嘉吉の乱を書きます。

第４章　嘉吉の乱

第４章　嘉吉の乱

赤松家は初代将軍尊氏を助けて活躍した。それで摂津・播磨・美作など五カ国を貰い、その守護職となっていた。

赤松家当主赤松満祐は６０歳を過ぎ傲岸不屈の性格で、領国の跡継ぎを考えている時期でもあったが、足利将軍家の動向を大いに気にしていた。

と言うのも、

今から１４年前の応永３４年、赤松家に内紛が起きた。

４代将軍足利義持は、一族の持貞の甘言、讒訴（ざんそ）のままに満祐を攻めた。

しかし、足利義持の寵愛を受けた持貞の専横を厭う攻略軍の諸将が連署し、義持に反抗して赤松満祐の赦免を強硬に願い出た。

この事件はまさに義持の政治的な失敗であった。その時は寵愛する赤松持貞を自殺させて収まったが、当の赤松満祐は将軍家にふくむところを持つようになった。

６代将軍の義教は絶えず地方豪族の弾圧を強硬におこなっている。さらに、前騒動の原因だった持貞の子の貞村を義教が寵愛している様子が、満祐にしてみれば一層不気味に思えていた。

当の貞村自身は義教に忠実に仕えているに過ぎないが、満祐としては警戒の眼を見張り不安の耳を立てずにはいられない。

その頃に、赤松氏についても瀬戸内の要地を占めるその領国を将軍が取り上げるのが狙いとみられ、満祐が兼ねる播磨・備前・美作（みまさか）三か国の守護職を削り、義教が寵愛する赤松貞村に与えようとして

いるとの流言、浮説が、洛中の大名や町民たちの口にまでのぼるようになった。
今度の噂もいつまた現実のものになるかもしれない。
相手が専制将軍だけにその不安は一層強く、そこで満祐は思い詰めた末、今度の兇行に及んだ。

嘉吉元年6月24日夕刻、腹の太い足利義教は気にもとめず、造園の好きな自分を新庭に招待してきた満祐がこの際、わだかまりを解きたいと思うているのかも知れぬと、東洞院にある赤松満祐の館へ出かけて行った。
その日の夕刻にわか雨があった。
「よいよい、よい雨じゃ、これで新しい庭の風情も変わろうというものじゃ。何を案ずる事があろうか。」
今日の行幸を案じている家臣が取りやめを進言する声を封じて義教が言った。
雨がやんでから、義教は50人ほどの行列をつくって赤松邸へ向った。
酒宴たけなわというところ、庭先の能舞台では、義教が贔屓にしている音阿弥が『鵜飼』を演じ始めた。既に大盃は五度座敷内をめぐり、かなり酩酊した義教は、膝を乗り出すようにして舞台に見入っていた。
と、その時である。邸の庭内でただならぬ物音が轟いた。
饗宴のさなかに、満祐は館中の馬、十数頭を放ち、
「余興を邪魔して申し訳ございませぬ。すぐさま鎮めさせまする。」
その言葉と共にその奔走をふせぐと称して、まず惣門を閉ざした。

これこそ、将軍弑逆を狙う赤松勢決起の合図であったのだが、そうとは知らぬ義教は、気にもとめず、舞台上の音阿弥に視線を固定したまま、ゆっくり大盃を口に運ぼうとした。
同時に屋敷内にひそんでいた家来200余人が躍り出し、獰猛果

敢に将軍の供廻りや侍臣を斬りまくった。
満祐は、ひそかに、播磨の領国から２００余人の家来を呼びよせ、刀鍛冶の備前泰光に３００振りの刀を打たせて準備をすすめていたことが後になってわかった。
悪夢を見るような一瞬であった。蛍の飛び交う雨あがりの新庭の美しさに酔っていた饗宴の場は、絶叫と、怒声と、飛び散る血にまみれた。
将軍義教は、満祐・教康の父子に組みつかれたかと見る間に、御座の間に血しぶきが噴き上げ、義教の上体が倒れ込む。その頸には、屏風の蔭から躍り出た赤松家中きっての勇者安積監物行秀の豪刀が食い込み、踏み倒された金屏風の上へ、義教の首が鮮血と共に叩きつけられるように落ちた。
その間管領・細川持之等は
「われらは将軍家に恨みを持つのみで貴公らはお逃げくだされ。」
と言う満祐の言葉に、身一つで転がるようにして逃れた。

赤松満祐は老体を鎧兜に固め、斬死の覚悟で幕府の討手を待ったが、その後７日間、一兵も寄せては来ない。
「公方にへつろう腰抜け大名共も、まさかこれほど腐っていようとはおもわなんだわい」
満祐は幕府の弱腰を憫笑（びんしょう）した後、館に火を放ち、一族郎党３８０余人を従え、堂々と暁の町を油小路から東寺へ抜け、播磨へ帰って行った。
これを追うものもなかったというのは、在京の諸大名は将軍暗殺のことを聞いて、たがいに疑惑と妄想の眼を向け合い、自分たちの防備を固めるばかりであった。
一ヶ月のちに、細川持之の奔走によって、ようやく幕府は軍を発し、播磨に赤松満祐を攻めた。
讃岐守護細川持常は数千騎を率いて満祐を蟹坂に攻め、山名氏清

が白旗城を抜き、満祐を自刃させ、どうにかこれを滅亡させることができた。

これが嘉吉の乱である。

この乱により、幕府の無力さ、将軍の権威のおとろえを衆目にさらすことになり、地方の守護大名の乱立を誘うこととなった。

話は地方に飛ぶが、当時讃岐国西方守護代として6郡を支配していた西方守護代香川修理亮景光と仁尾浦代官香西氏との間で兵船調達に関わる紛争があった。

満祐は播磨に逃げ戻った所を幕府軍に攻め滅ぼされたが、義教の突然の死はその施政が過酷であっただけに、世間一般にある種の開放感をもって受け止められたようである。

「看聞御記」は、「此ノ如キ犬死、古来其ノ例ヲ聞ザル事ナリ」と記し、

街角には次の落書が出た。

いなかにも京にも御所の絶えはてて
公方にことを嘉吉元年

先年鎌倉公方持氏が義教殺されたかと思ったら、今年は京の公方義教が非業の死を遂げた。まさに年号通り、公方に事を嘉吉（欠きつ）元年であるという意味である。

嘉吉の乱である。

作者より

今回は歴史を遡るだけで終始しましたが、当時の周辺状況としてご理解ください。
いよいよ次回からは小説本文へと戻ります。

第5章　守護代香川修理亮景光

第5章　守護代香川修理亮景光

この嘉吉の乱により、守護代香川修理亮景光は兵船の徴発に入っていたのである。
当時香川氏は讃岐国13郡の内西讃6郡、多度、三野、豊田、鵜足、那珂、阿野北条を統治領有し、石高も9万石を数える大名である。

「ふむふむ、やはりな。五郎左衛門め、やりおったわい。」
天霧城城主香川景光は居館である本台山城の居間で家老の河田伝兵衛から事の次第を耳にし、判りきった事よと言わんばかりにつぶやいた。
「されど、我らはいかが致すものでしょうか。」
「よいよい。捨て置け。今に面白くなるぞ。民が決めるわい。」
「ならば、船だけでも見張っておきましょうぞ。」

この年は早くから炎暑が続き、田植えを終えたあたりから雨が一滴も降らない日々が続いていた。
雨を見なくなって2ヶ月も過ぎている。
各地では雨乞いの行事が行われているがその効き目はいっこうに現れてこない。
田畑や溜め池の水は枯渇し、底には亀裂が走り、亀の甲羅状態にも見られる。
稲はすべて死んだようになり果てていた。
「今年の夏はどうなっているんじゃろう。」

「このまま雨が降らなんだら、わしらはどうすればええんじゃ。」
「さむらい衆の乱れからのたたりじゃなかろうか。」
四民は思うに任せてささやきあった。

ここ仁尾浦も暑さにあえいでいた。
木も草もぐったりと首をたれ、土地は乾ききって砂塵を風が巻き上げている。
ただ他所と違うところは、他所以上に人々の気概がなくなっていた。

二日後、船頭親子は開放されたが、追って惣官の原新兵衛尉へ守護代への兵船用立てに関しての糾明と罪科が行われた。
すでに兵糧銭催促、一国平均役催促、更に代官の父逝去徳役５０貫文の課徴督促などが続き、先の守護代への兵船仕立てで４０貫もの出費になっている上に、罪科を申し渡された神人達は、原新兵衛尉を代表として代官改易欲求を訴えた。
「新兵衛尉様、わしらはもうあかん。船頭の弥五郎と息子は逃げてしまったが、かかあや親類は捕らえられるし、あの代官は仁尾の神人みんなに死ねと言うのかよお。」
ある日、村人の一人が新兵衛尉をたずねて、横一文字の目から大粒の涙を流しながら哀願した。
「まあ、まて。今に訴えを御聞き届けになったと言う返事がくるから。」
原新も、代官の事となれば打つ手も無くただ同じ言葉を神人達に繰り返すばかりである。
「なら、いつまで待てばいいだか。昨日も隣はいなくなるし、わしらの部落じゃもう半分ものこっとらん。」
「新兵衛尉殿、わしは明日、守護代様に寄進の事で会うのじゃが、どうじゃお主も同道すまいか。」
一部始終を聞いていた大水主大明神の神主が横合いから声をかけ

た。
「おお、そうじゃな。わしもそろそろ考えておったところじゃ。」
渡りに船とばかりに新兵衛尉は合槌を打ったものだが、代官との手前大手を振って守護代様に目見えの為に出かける訳にもままならずと思案顔を神主に向けた。
「心配せずとも良いわ、わしが何とか思案をする。」
「ならば、同道させて頂くとするか」

「おう珍しい御人が見えるわい。」
香川氏代々の居館である本台山城を訪ねた二人の老人を前にして、彼等の待つ居間に入ると同時に香川景光は大きく手を広げて歓待の意志表示をしながらドッカと柱を背にして腰を下ろした。
「どうしたその格好は」
庭職人の格好をし神主の横で床に頭をこすりつけている新兵衛尉をからかう様に言った。
「へえ、御無沙汰致しております。わたしも老境に入りましたので、庭木いじりでもして余生を暮らそうと考えております、はい」
「ほぅ、うまい事を言う。じゃが、わしは床では無いから顔を見せて話してはくれんか。」
「へへー、申し訳ございません」
苦渋をにじませた新兵衛尉の顔に景光はほほえんで見せ、神主に向かって言った。
「ところで雨が降らん。神主さん寄進が足らんのかのう。」
「ほうほう、私もこの原新と同じく老境に入りましたのでな、今一つ効き目が薄れてきましたかな。」
「それは困る。大水主社祭百襲姫命の神子三郎殿が言われる言葉とも思えない」
「ま、そうも言いなさんな。そのうち降りますわな。」
エヘンと咳払いを挟んで、老人は背筋をピンと立て言葉をつないだ。

「ご存知の様に、仁尾浦では大変な事になっております。村人達は徴散を始めるし、このままでは殿様から兵船の要請があったとしても受ける訳にはならなくなるやも知れません。どうか早急に手を携えてはいただけませぬか」
「おう、わしも懸念しておった。あの船頭にも無理強いを頼んだ事でもあるし、ところで村人の徴散はいかばかりになっておるのじゃ」
「はい、今ではすでに半数はと数えられます」代わって新兵衛尉が答えた。
「そうか、半数か。」
頭を抱え込む新兵衛尉に景光は肯き、
「それで代官はいかが致しておるのじゃ」と言葉をつないだ。
「それでございます。この様な状態をお分かりの筈じゃのに、未だに親父どのの逝去徳役５０貫文の要求をされております。」
「無体な。」
景光の大きな声に二人の老人はハッと顔を上げ、目の前の色黒の大殿を見、そして二人で目を見詰めあった。

「その様な無体があって良いものか。よし、丁度、讃岐守様から早く船をしたてよとの催促があったところなので、京へ登った時にわしからも言ってやろう。ところで逃げるなら、わしのところへ逃げろと村人へは言っておけ。事が収まれば返してやる。」
「ははー、ありがとうございます。」
来た時と違って二人は十歳も若返った気持ちで、本台山城を後にした。

第６章　調停

第６章　調停

「殿、やはり参りましたな。」
横で一部始終を聞いていた河伝事、筆頭寄子の河田伝兵衛が、景光の先見に敬をあらわにして肯きながら言った。
「そうじゃ、我々が手を下さずとも民の方が動いたであろう。」
「殿の先見の明、恐れ入りまする。」
「そうじゃ河伝、その方に兵７０を預けるので、多度の津から二隻で早速にも京へ上れ。そして今聞いた事を寸部違わずに讃岐守様に申し述べよ。されど肝に命じておけ、奏上するだけで喧嘩の仲裁をするでは無いぞ。長引けば長引く程これは我が手にとって良い事じゃからのう。そうじゃ、急ぎ白方に難民の為の長屋を整えよ。」
「殿、白方では天霧城への登り道ゆえ、香西の密偵などが混ざっていた場合にはまずうござろう。多度の津が良いかと思われますが。」
「おう、さような事もあろうわな。そうじゃ漁民も多い事じゃし、多度の津がよかろう。すぐに差配せい。」

「まぁ河伝、そう言うな。香西にも兵船を用立てろとはわしから言ったことじゃが、その香西五郎左衛門という人物はわしは知らん。わが手の香西豊前守の手の者じゃろう。判った判った。修理亮殿へはわしから文をつかわす。お主は早々に帰って更なる兵船を差配しろ。」
京にのぼった河伝は数日待たされたのち、讃岐守護細川満元に目通りすることが出来、浦住人による代官改易要求の訴えなどを上奏し、考えていた以上の返事を貰った。

「実は讃岐守様からご返事を賜ります以前に拙者なりに探索いたして見ましたところ、京の香西とこちらの香西とは少しばかり宗旨が違っている様子です。しかしこの事は讃岐守様へは申しておりません。」

本台山城へと帰った河伝は居間で小姓達を遠ざけて香川景光にささやいた。

「何、それはいかがな事か。」

「はい、京の香西は勿論讃岐守様の命で動かれておりますが、香西五郎左衛門へは赤松入道から何らかの誘いが入っているよしに存じます。」

「待て、河伝。めったな事を申すでない。それには証になることでも有るのか。」

香川景光は河伝の言葉を遮って扇子をかざし言った。

「ははっ、それが残念な事に、何一つ証はございません。されどあれから香西五郎左衛門が仕立てた兵船は塩飽に留め置かれておる由、状況を静観しているとしか見られませぬ。」

「まぁよいわ。その内讃岐守様からの御奉書なりが届けば話は終わる事じゃ。それより神人の多度津への移住は何名を数えたかの。」

「ははっ、恐れ入ります。その件に関しましてはまだはきとした数は数えておりませぬが、２００を超えたかと存じまする。」

「そうかそうか２００を超えたか。そうじゃ香西五郎左衛門が用立てた船は何艘じゃな。」

「はい、塩飽に留め置かれているのは６艘と存じます。」

「そうか、さすれば仁尾浦ではその為に１００貫文を費やしたな。よし、河伝。仁尾浦へ１０艘の兵船を用立てるように差配せよ。」

「えっ、この上の兵船用立てですか。」

「そうじゃ、そうすれば香西五郎左衛門の動きも判ろうと言うものじゃ。」

それからおよそ一月後に香西五郎左衛門の賄いを止められるべき由の『御奉書』を得る事が出来、仁尾浦神人はすべて還住した。
原新兵衛尉と大水主社神主の二人は本台山城へお礼に参上した。
「此度は殿様のご寛大なるお働きで神人皆揃って大水主社の祭礼が執り行えることになりました。まことにありがとうございました」
二人が這い蹲るように頭を下げる前で香川景光は、おうように言った。

「おうおう、そう頭を下げるものではないぞ。何だかんだと言いながらも元に戻ってめでたいことじゃ。それに神主さんの働きで雨も十分に降ったことじゃし、ともにめでたいことじゃよ。」
「はは、ありがたいお言葉。恐れ入ります。」
「つきましては、来月9月15日、当社の御祭礼を執り行いたいと存じますのでよろしく御差配の方お願い申し上げます。」
「おうそうか、そうか。めでたいことじゃからのう。よしよし、秋山壱岐守に申し付けておこうぞ。神人すべてが憩えるようにな。」

第7章　御奉書

「えーぃ。何故にこのような沙汰を受けとらねばならぬのじゃ。守護代め、おのれが甘い汁を吸わんが為に、吾らを落としいれようと策を弄したのに違いない。えーぃ、このままでは済まさぬぞ。船越輿三郎。どうじゃお主、知恵を出さんか。」

浦代官香西五郎左衛門は収まらず、御奉書を手に代官補の船越輿三郎を前にして落ち着きなくイライラと歩き回りながら言った。

右に左に代官の動きに目を配りながら、いかつ顔をかしげながら輿三郎は頭をめぐらせた。

「恐れながら、御奉書には徳役を課すのを差し止めるのみとしか書かれておりませぬ。税課を課すに関しては問題はござらぬでありましょう。仁尾浦の陸部は、彼在所は浜陸一同事、先年落居しおわんぬとされており、陸部の田畠での作物は神人達の採り放題でござる。いっそこれに税課を課せばいかがでしょう。」

「おっ、ほほほぅ。輿三郎。よいよい。それ良いぞ～。」

青白い公家顔の香西五郎左衛門は手に持った扇子を鳴らしながらイライラと歩き廻っていた足を止め、

「お主は切れるのう。それじゃ、それじゃ。まだその手があったか。まぁ見ておれ、守護代め。目にもの見せてくれるは。よし輿三郎。早速、陸部の検地を差配し、掌握せよ。」

船越輿三郎の肩を扇子で叩きながら言った。

命を受けた代官補の船越輿三郎は、早速同所陸分の内検を強行した。すなわち陸上部の田畠を掌握してその部分に対して、別の課税を行おうとしたものだ。

かわいそうなのは仁尾浦の住人たちである。海上の諸役をつとめることで、浜とみなされた陸部に田畠が存していても、今まではその部分への課役は免がれていた。

第7章　御奉書（後書き）

☆作者から☆

野暮用が多すぎてほったらかしになっておりました。陳謝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2166c/

仁尾浦騒動

2010年10月16日14時58分発行